

看護師の学士課程教育における地域看護診断演習の効果

著者	清水 信輔, 田口 (袴田) 理恵, 榎本 晃子, 河原智江, 佐藤 美樹, 西崎 未和, 竹内 葵和子
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	7
ページ	23-32
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003351/



研究報告

看護師の学士課程教育における地域看護診断演習の効果

The effects of an education program for community health nursing diagnosis in the bachelor level course for nursing

清水 信輔 田口(袴田)理恵 榎本 晃子
Shinsuke Shimizu Rie Hakamada-Taguchi Akiko Enomoto
河原 智江 佐藤 美樹 西崎 未和 竹内葵和子
Chie Kawahara Miki Sato Miwa Nishizaki Kiwako Takeuchi

キーワード：看護師、看護学士課程、地域看護診断

key words : nurse, bachelor level course for nursing, community health nursing diagnosis

要旨

目的：看護師の学士課程教育における地域看護診断演習の効果について明らかにする。

方法：2019年度にA大学の看護師教育課程の科目「地域看護学援助演習」を受講した3年生のうち、研究に同意した87名を対象とした。演習のレポートから学修内容についての記述を抽出し質的帰納的に分析した。

結果：地域看護診断演習によって、学生は【地域の健康課題を分析していく視点と方法の獲得】、【地域の健康課題に対する支援を検討していく視点の獲得】、【地域看護の特質への理解の深まり】、【地域看護への関心と視野の広がり】、【効果的なチームワークについての理解の深まり】を学修していた。

結論：学生は、地域や人々の生活状況を踏まえて支援すること、地域看護への関心と地域を支える一員として自覚をもつこと、チームワークについて学んでいた。以上から、本演習は今後の保健医療を担う看護師に必要とされる力の獲得に効果があったといえる。

Abstract

Objective: The purpose of this research is to clarify the effects of education program for community health nursing diagnosis in the bachelor level course for nursing.

Method: The subjects were 87 of third grade students of bachelor nursing course in A University that took "an education program for community health nursing diagnosis" in 2019 and gave consent. Text related to learning outcomes of the program were abstracted from the assignment report and qualitative-inductive analysis was conducted.

Results: The effects of an education program for community health nursing diagnosis were shown to be consisted of followings; "Gaining perspectives and methods for analyzing community health issues", "Gaining perspectives to consider support to community health issues", "Deepening their understanding of the characteristics of community health nursing", "Increase in interest and widening of perspectives towards community health nursing", and "Deepening their understanding of effective teamwork".

Conclusion: Through this program, students learned about support based on local characteristics and people's living conditions, and about teamwork. The students also became interested in

community health nursing and aware as members of the community. Therefore, it is considered that this program was effective in acquiring the competence required for nurses useful in future health care system.

I. はじめに

我が国は、これまで経験したことのない人口減少社会に突入しており、労働力人口の減少などから、経済の縮小が見込まれている。また急速な高齢化の進展により、医療費や介護給付費を中心に社会保障給付費が益々増大していくことが予測されている。このような状況において、生活習慣病の発症や重症化予防、介護・認知症予防などの予防の重要性が指摘されており、健康寿命の延伸が喫緊の課題となっている。さらに医療・介護においては、病院と地域との連携・協働を強化し、「病院完結型」から「地域完結型」への転換が進められている¹⁾。このためには、地域における医療・介護の基盤を充実させるとともに、医療や介護、予防などのサービスを一体的に提供し、地域全体で支えていく地域包括ケアシステムの構築が求められている。

地域包括ケアシステムの実現に向け、今後の保健医療を担う看護師には、退院していく患者や外来患者に対する居住地域や生活状況を踏まえた支援、地域住民や多職種多機関と連携・協働しながら在宅療養生活が継続できるための支援、加えて健康レベルが高い人に対しても生活習慣病予防や介護・認知症予防を行うといった予防的支援などを担っていくことが期待される。そのため看護師には、対象者を取り巻く地域や生活をとらえてケアを実践する力や、地域で生活していくために必要となる社会資源と連携・協働していく力、地域での生活を踏まえて予防的支援を行う力などが求められ、さらに支援において既存資源の活用だけでなく、新たな資源を創出していく力もより一層求められる^{2,3)}。2019年の厚生労働省の看護基礎教育検討会報告書では、看護師基礎教育において、地域包括ケアシステムの推進に向け、より地域に目を向けた看護の力を強化する方向性が示されている⁴⁾。このことから看護師教育課程において、看護師に必要となる力の獲得に向けた教育内容を検討していくことは急務であるといえる。

看護師教育課程において、地域特性や対象者の

生活を捉え、予防的な視点をもって健康課題をアセスメントし、住民や多職種多機関と連携して、健康課題を支援する方策を検討していくための技術である「地域看護診断」を学修する演習を取り入れることは、今後の保健医療を担う看護師に必要となる力の獲得に寄与するものと考えられる。「地域看護診断」は他の看護学分野にはない地域看護学特有の技術であり、これからの看護師教育に必須の教育内容として提言されている⁵⁾。しかしながら、「地域看護診断」は保健師教育課程において、公衆衛生看護技術の一つとしてその教育が行われ、その効果については検討が行われてきているが⁶⁾、看護師教育課程においては、ほとんど教育されていないのが現状である。

そこで本研究では、看護師教育課程の学生を対象とした先駆的な取組みとして、A大学の看護学部で実施されている地域看護診断演習の効果を明らかにし、今後の保健医療を担う看護師に必要となる力を獲得するための効果的な教育内容や方法について示唆を得ることを目的とした。

II 用語の定義

本研究において、「地域看護診断演習の効果」とは、地域看護診断を用いた演習を通して学生自身がとらえた、学んだこと、身につけたこととした。

III 本研究で対象とした「地域看護診断演習」の概要

1. 本演習のねらいと特徴

本演習のねらいは、(1)地域看護診断および地域の健康課題の解決に向けた支援策を計画・立案する方法を獲得すること、(2)あらゆる健康状態にある人々の予防的支援への理解を深めること、(3)住民や多職種多機関への敬意や、連携・協働に関心をもって理解を深めること、(4)効果的なプレゼンテーションや質疑応答を行い、それを活用してアセスメントや支援策の改善を検討できること、(5)グループメンバーと協力しながら、自身の役割を遂行し、他のメンバーの力を引き出すことに貢献

すること、という5つの内容について学修することである。

本演習の特徴は、地域の健康課題に関する情報収集を既存資料だけでなく、地区踏査および地域住民や保健福祉機関職員等へのインタビューといったフィールドワークを通して実践的に行っていることである。また、地域の健康課題に対する支援策の検討にあたっては、看護師や看護学生の立場で行える支援を計画立案していることも大きな特徴である。加えて、演習は全ての過程においてグループワークで展開している。

なお、本演習では、地域看護診断を行う上でのデータ収集、分析の枠組みとして、コミュニティ・アズ・パートナーモデル（以下、CAPモデル）⁷⁾の理論を用いている。CAPモデルは、地域を構成する人々であるコミュニティコア（以下、コア）を環境特性である8つのサブシステム（物理的環境、教育、安全と交通、政治と行政、保健・社会サービス、コミュニケーション、経済、レクリエーション）が取り囲み、互いに影響を及ぼしているとするものである。

2. 履修時期と条件

本演習は、3年生前期・必修科目「地域看護学援助演習」（1単位）の全15コマを用いて実施した。学生は、本科履修前に2年生前期・必修科目である「地域看護学概論」において、地域看護学の基本となる考え方を学修し、その後、2年生後期・必修科目である「地域看護学援助論」において、地域看護診断の理論的枠組みと方法論を学修している。

3. 本演習の内容（表1）

- 1) 地域看護診断を行う対象フィールドは、A大学の所在区である東京都B区であり、出張所地域ごとの小地区に分け、各グループの担当地区とした。また担当地区ごとに高齢者もしくは未就学である母子のいずれかを選択し、各グループが対象とするコアを決定した。グループは1グループにつき5～6名程度の学生で編成した。
- 2) 情報収集は、統計資料や行政報告書、インターネット等の既存資料、B区の保健師によるB区の健康課題と支援の実際に関する講

話、地域住民や保健福祉機関職員等へのインタビュー、担当地区での地区踏査によって行った。

- 3) 情報収集を行ったデータは、担当地区の「概況」と「コアの特性」、「サブシステムの特性」の視点で整理し、健康課題とその関連要因を査定した。
- 4) 担当地区の健康課題に対して、支援策の計画立案を行った。支援策は、看護師もしくは看護学生が実施するものとして、計画立案した。
- 5) 成果発表会では、グループごとにスライドを用いてプレゼンテーションを行った。なお、成果発表会には対象フィールドの協力者を招き、コメントをいただいた。
- 6) 最終課題では、学修内容を整理するために、レポート作成を課した。テーマは、「地域看護学援助演習を通して学んだこと」とし、演習を通して学んだことや身につけたこと、十分身につけられなかったことや今後の課題について、A4判3枚程度でまとめ、提出させた。

表1 演習の内容

回	内容
1	オリエンテーション / 地区データの収集・分析
2	保健師による講話：保健師の捉える健康課題と支援の実際
3	地区データの収集・分析
4～5	地区踏査・インタビュー計画
6～9	地区踏査・インタビューの実施
10～11	地区踏査・インタビューデータ分析
12～13	健康課題に対する支援計画の立案
14～15	成果発表会

IV 方法

1. 対象者

本研究では、A大学看護学部在籍し、2019年度に「地域看護学援助演習」を受講した3年生88名のうち、研究協力の同意が得られた87名を対象者とした。

2. データ収集方法

調査期間は2019年6月～7月で、データは、学生が提出したレポートの記述内容とした。

3. 分析方法

データ分析は、質的帰納的に分析した。レポートの記述内容のうち、「演習を通して学んだこと、身につけたこと」に関連したものを全て抽出し、要約してコードとした。そして意味内容の共通するコードをまとめ、サブカテゴリとした。さらにサブカテゴリの中で共通する意味内容をもつものをカテゴリとした。最終的にカテゴリの共通する意味内容をもつものをコアカテゴリとした。分析は複数の研究者で行い、繰り返しデータに戻り、妥当性を確かめながら、精緻化していった。

4. 倫理的配慮

本演習終了時に、学生に対して研究の目的、方法などについて、研究説明書を用いて書面と口頭にて十分に説明した。また、研究への協力は自由意思であり、協力の有無が成績評価に一切関係しないこと、また協力しない場合や同意を撤回する場合も不利益はないことについて説明した。研究への協力を同意した場合のみ、研究同意書に署名してもらい、同意を確認した。

分析にあたっては、個人を特定できないようにレポートから研究協力者の氏名を削除してIDで管理し、個人情報の保護に努めた。本研究は共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号KWU-IRBA#19006)。

V 結果

演習でのレポートの記述から、地域看護診断演習の効果について、44サブカテゴリ、11カテゴリ、5コアカテゴリが生成された(表2)。以下、コアカテゴリを【 】、カテゴリを《 》、サブカテゴリを〔 〕として示した。

生成したコアカテゴリは、【地域の健康課題を分析していく視点と方法の獲得】、【地域の健康課題に対する支援を検討していく視点の獲得】、【地域看護の特質への理解の深まり】、【地域看護への関心と視野の広がり】、【効果的なチームワークについての理解の深まり】であった。以下、コアカ

テゴリごとに説明していく。

1. 【地域の健康課題を分析していく視点と方法の獲得】

本演習を通して、学生は膨大な情報の中から、《地域特性を把握する視点(の獲得)》や《住民目線で地域の実態をとらえる方法(の獲得)》を用いて必要な情報を効率的に入手し、《健康課題を見出す視点(の獲得)》に基づき、健康課題を分析していく必要性を理解していた。これら3つのカテゴリは、地域の実態をとらえ、健康課題を明らかにしていく視点や方法を身につけているものであり、【地域の健康課題を分析していく視点と方法の獲得】というコアカテゴリを生成した。以下、コアカテゴリの構成要素である、各カテゴリについて説明する。

《地域特性を把握する視点の獲得》というカテゴリについて、学生はまず住民を取り巻く〔地域の生活環境をとらえながら地域特性をみていく〕視点を獲得していた。またコアによって地域の長所や短所、活用できる資源などが異なることから、地域特性を把握していく過程で、〔コアの視点をもって地域特性をみていく〕視点や〔コアに応じた地域の強みをみつける〕視点を得ていた。さらに既存資料を活用して〔経時的変化や他地域を比較しながら地域特性をみていく〕視点も獲得していた。加えて今回の演習では、CAPモデルを活用したことから、〔理論・枠組みを活用することで効果的なアセスメントを行うことができる〕ことを、経験を通して実感していた。

《住民目線で地域の実態をとらえる方法の獲得》というカテゴリについて、学生は地域を歩きながら、自らの五感を活用し、直接住民の生活に触れる中からみえてくる地域の実態をとらえることにより、〔地区踏査を行うことで住民に近い視点で生活の状況を直接把握できる〕ことを経験し、住民や保健福祉機関職員などの地域のキーパーソンに〔インタビューを行うことで住民の声やニーズを直接把握できる〕必要性を理解していた。さらに既存資料のデータだけではわからなかったことや、地域の実態をより具体的に把握していくために、〔既存資料に加えて地区踏査やインタビューを行うことでより現実的な実態把握ができる〕ことが理解できていた。これらの経験から学生は、〔住民の目線で地域の実態を把握していくことが

必要である] ことを実感していた。

《健康課題を見出す視点の獲得》というカテゴリについて、学生は地域の実態を把握するために、様々な情報源からデータを収集し、情報の種類によって把握できる内容が異なることを経験し、〔多角的な情報を統合しながら健康課題を明確化していく〕必要性を理解していた。また、多様な健康課題が浮上してくる中で、〔重要性や緊急性、住民のニーズなどをもとに健康課題の優先順位を判断していく〕必要性を認識していた。加えて成果発表会の他グループの発表を通じて、〔同じコアでも地域特性によって健康課題の違いが生じる〕ことや、〔類似した健康課題でも地域特性やコアによって原因・背景に違いが生じる〕ことを実感していた。

2. 【地域の健康課題に対する支援を検討していく視点の獲得】

地域の健康課題を解決していくためには、健康課題に対する効果的な支援を計画・実施していくことが必要となる。今回の演習を通して、《支援の方向性を決めていく視点の獲得》や《支援を具体化していく視点の獲得》をしていた。この2つのカテゴリは地域の健康課題の解決に向け、支援を検討していくために必要な視点であり、【地域の健康課題に対する支援を検討していく視点の獲得】というコアカテゴリを生成した。以下、コアカテゴリの構成要素である、各カテゴリについて説明する。

《支援の方向性を決めていく視点の獲得》というカテゴリについて、学生は地域の健康課題を明らかにし、その解決に必要な支援を検討していくために〔目的・目標を明確にして支援を計画・実施していく〕視点をもつことを学んでいた。その上で、地域に合わせた支援を行っていくために〔地域特性を踏まえて支援を計画・実施していく〕視点や健康課題の原因や背景にアプローチし、問題の解決に向けた支援を検討するために、〔健康課題の原因・背景を踏まえて支援を計画・実施していく〕視点も得ていた。また、地域の健康課題を解決していくためには個人への働きかけだけでなく、地域全体に働きかける〔ポピュレーションアプローチを活用して支援を計画・実施していく〕視点や〔支援につながりにくい住民に対する支援も検討していく〕視点を獲得してい

た。このように地域の健康課題において支援の方向性を検討していくための視点を得ていた。

《支援を具体化していく視点の獲得》というカテゴリについて、学生は実際に地域の健康課題に対して支援を行っていくためには、〔地域の強みを活かした支援を計画・実施していく〕ことを視点として学んでいた。加えて、地域の強みを活かした支援は、公的な機関やサービスなどのフォーマルな資源にとどまらず、家族や近隣住民、ボランティアなどの〔インフォーマルな資源も活かして支援を計画・実施していく〕視点を学んでいた。さらに支援を行っていくためには、今まで地域に存在する資源をうまく活用していくことやそれが難しい場合や資源が存在していない場合には新たに資源を創出していくなど、〔既存資源の活用や新たな資源を創出して支援を計画・実施していく〕視点を得ていた。そして、支援を検討していく際には、現実的に支援を行うことが可能かどうかという〔実現可能性を考えた支援を計画・実施していく〕視点を獲得していた。このように地域のもつ強みや住民のニーズ、活用できる資源などを踏まえながら、地域の健康課題に対する支援を具体化していく視点を得ていた。

3. 【地域看護の特質への理解の深まり】

地域全体の健康レベルを向上させるためには、地域で生活するあらゆる健康状態にある対象者とその家族に対して予防的視点をもって支援を行っていくことが必要となる。今回の学修から、《地域の健康を高める予防的支援への理解》を深めていた。さらに予防的支援を行っていく上で必要となる《地域の健康を支える住民の主体性（の理解）》や《地域と連携・協働していく考え方の理解》を深めていた。これら3つのカテゴリは地域看護にとって欠くことのできないものであり、その特質として共通する要素であることから、【地域看護の特質への理解の深まり】というコアカテゴリを生成した。以下、コアカテゴリの構成要素である、各カテゴリについて説明する。

《地域の健康を高める予防的支援への理解》というカテゴリについて、学生は予防的視点をもって健康をとらえていくことの必要性から、〔病気になる前から健康を維持・増進することが重要である〕ことを学んでいた。また〔予防的支援により地域全体の健康リスクの解消につながる〕や

〔予防的支援により地域全体の健康レベルの底上げにつながる〕ことで、結果として、〔予防的支援により疾病や障害を予防することで住民のQOL向上につながる〕ことを理解していた。さらに看護には、疾病や障害の治療に限らず、〔疾病や障害の予防に向けた看護の役割がある〕ことを認識していた。このように住民の健康に目を向け、予防的支援の必要性やその意義について理解していた。

《地域の健康を支える住民の主体性の理解》というカテゴリについて、学生は地域の健康レベルを高めるための予防的支援を行っていく上では、一方的に全ての支援を行うのではなく、住民が健康課題を自分たちの問題としてとらえ、〔(住民が)主体的に健康課題に取り組むことが必要である〕ことを学んでいた。そして、他の社会資源に加えて、主体的な立場から〔住民も地域の社会資源の一つとして多職種多機関と協働しながら健康課題に取り組んでいる〕ことをとらえていた。また、それに対して〔住民が主体的に地域の健康を支えていけるように支援する看護の役割がある〕ことを理解していた。このように住民が主体的に地域の健康を支援していくことの必要性やその意義について理解していた。

《地域と連携・協働していく考え方の理解》というカテゴリについて、学生は〔住民や多職種多機関が連携・協働することが重要である〕ことを学んでいた。そして、連携・協働していくことにより、〔住民や多職種多機関の連携・協働ではそれぞれの役割を活かし足りない部分を補い合っている〕ことや、そのためにも、〔住民や多職種多機関同士の信頼関係の獲得が連携の強化につながる〕ことが、住民や多職種多機関の関係を密なものにし、効果的に連携・協働をしていく上で、必要な考え方であることを認識していた。そして効果的な連携・協働をしていくためにも、住民や多職種多機関と関わりが多い看護職としての立場を活かし、〔住民や多職種多機関をつないでいく看護の役割がある〕ことを理解していた。このように住民や多職種多機関との連携・協働していくことの方針について理解していた。

4. 【地域看護への関心と視野の広がり】

本演習全体を通して、学生は《地域看護を理解するための新たな視点の広がり》を得て、地域で

生活する人々を支援するために、社会情勢や制度などにも視野を広げて学修していく必要性を実感していた。また将来は看護師として《地域を支える一員としての意識の高まり》を得ていた。これら2つのカテゴリから、【地域看護への関心と視野の広がり】というコアカテゴリを生成した。以下、コアカテゴリの構成要素である、各カテゴリについて説明する。

《地域看護を理解するための新たな視点の広がり》というカテゴリについて、学生は地域看護の対象は、社会背景や制度やサービスの影響を受けながら生活する人々であることを実感し、〔地域看護を行うためには専門知識以外の幅広い知識や視野をもつことが大切である〕という視点を得るとともに、〔地域看護は今日の社会課題と密接につながっている〕ことを実感していた。また、単に疾病の予防や治療だけでなく、〔地域でその人らしく生活するために必要な支援を提供することも看護の大切な役割である〕という視点を得ていた。

《地域を支える一員としての意識の高まり》というカテゴリについて、学生は〔看護学生の立場でも地域にできることが数多くあることに気づく〕ことや、〔看護師として病院に就職した後も地域にできることがあることに気づく〕ことができていた。このようにどのような立場であっても、地域に目を向け、自分たちも地域を支えていく、地域の一員としての意識を実感していた。

5. 【効果的なチームワークについての理解の深まり】

本演習は、グループワークでの作業を中心に展開されているため、メンバーとのやり取りから、《グループワークを行う意義についての理解》が得られ、グループワークでの多くの学びを通して、その意義についての理解が深まっていたことから、【効果的なチームワークについての理解の深まり】というコアカテゴリを生成した。以下、コアカテゴリの構成要素である、カテゴリについて説明する。

《グループワークを行う意義についての理解》というカテゴリでは、学生はグループワークを円滑に、効果的に進めるためには、グループワークの役割分担や役割間で協力するなど、チームワークを高め、〔メンバー同士で協力してものごとを

進めていくことが大切である] ことや [メンバー同士が責任をもって課題に取り組むことで効率的に作業を行うことができる] ことを理解していた。

またグループワークを進めていく中で、メンバー一人一人の物の見方や意見が異なることを知り、自分の意見とは異なる、もしくは自分では気づくことができなかった視点や考え方を踏まえて

課題を検討することにより、健康課題の分析が深まり、支援計画が具体化していくことを経験し、[他者に自分の考えを共有することが大切である] ことや、[メンバー同士の多様な意見によって幅広い視点から物事を考察できる] こと、また [メンバー同士の意見を柔軟に取り入れることで客観的に物事を考察できる] ことを理解していた。

表2 看護師の学士課程教育における地域看護診断演習の効果

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
地域の健康課題を分析していく視点と方法の獲得	地域特性を把握する視点の獲得	地域の生活環境をとらえながら地域特性をみていく
		コアの視点をもって地域特性をみていく
		コアに応じた地域の強みをみつける
		経時的変化や他地域を比較しながら地域特性をみていく
	住民目線で地域の実態をとらえる方法の獲得	地区踏査を行うことで住民に近い視点で生活の状況を直接把握できる
		インタビューを行うことで住民の声やニーズを直接把握できる
		既存資料に加えて地区踏査やインタビューを行うことでより現実的な実態把握ができる
	健康課題を見出す視点の獲得	住民の目線で地域の実態を把握していくことが必要である
		多角的な情報を統合しながら健康課題を明確化していく
		同じコアでも地域特性によって健康課題の違いが生じる
地域の健康課題に対する支援を検討していく視点の獲得	支援の方向性を決めていく視点の獲得	類似した健康課題でも地域特性やコアによって原因・背景に違いが生じる
		重要性や緊急性、住民のニーズなどをもとに健康課題の優先順位を判断していく
		目的・目標を明確にして支援を計画・実施していく
		地域特性を踏まえて支援を計画・実施していく
	支援を具体化していく視点の獲得	健康課題の原因・背景を踏まえて支援を計画・実施していく
		ポピュレーションアプローチを活用して支援を計画・実施していく
		支援につながりにくい住民に対する支援も検討していく
		地域の強みを活かした支援を計画・実施していく
		インフォーマルな資源も活かして支援を計画・実施していく
		既存資源の活用や新たな資源を創出して支援を計画・実施していく
地域看護の特質への理解の深まり	地域の健康を高める予防的支援への理解	実現可能性を考えた支援を計画・実施していく
		病気になる前から健康を維持・増進することが重要である
		予防的支援により地域全体の健康リスクの解消につながる
		予防的支援により地域全体の健康レベルの底上げにつながる
	地域の健康を支える住民の主体性の理解	予防的支援により疾病や障害を予防することで住民のQOL向上につながる
		疾病や障害の予防に向けた看護の役割がある
		住民が主体的に健康課題に取り組むことが必要である
	地域と連携・協働していく考え方の理解	住民も地域の社会資源の一つとして多職種・多機関と協働しながら健康課題に取り組んでいる
		住民が主体的に地域の健康を支えていけるように支援する看護の役割がある
地域看護への関心と視野の広がり	地域看護を理解するための新たな視点の広がり	住民や多職種多機関が連携・協働することが重要である
		住民や多職種多機関の連携・協働ではそれぞれの役割を活かし足りない部分を補い合っている
		住民や多職種多機関同士の信頼関係の獲得が連携の強化につながる
	地域を支える一員としての意識の高まり	住民や多職種多機関をつないでいく看護の役割がある
効果的なチームワークについての理解の深まり	グループワークを行う意義についての理解	地域看護を行うためには専門知識以外の幅広い知識や視野をもつことが大切である
		地域看護は今日の社会課題と密接につながっている
		地域でその人らしく生活できるように必要な支援を提供することも看護の大切な役割である
		看護学生立場でも地域にできることが数多くあることに気づく
		看護師として病院に就職した後も地域にできることがあることに気づく
効果的なチームワークについての理解の深まり	グループワークを行う意義についての理解	メンバー同士で協力してものごとを進めていくことが大切である
		メンバー同士が責任をもって課題に取り組むことで効率的に作業を行うことができる
		他者に自分の考えを共有することが大切である
		メンバー同士の多様な意見によって幅広い視点から物事を考察できる
		メンバー同士の意見を柔軟に取り入れることで客観的に物事を考察できる

VI 考察

1. 看護師の学士課程教育における地域看護診断演習の効果

1) 地域や生活をとらえ、支援していく視点や方法の獲得

本演習を通して学生は、住民の生活に立脚し、地域の健康課題を分析していく枠組みをもって、《地域特性を把握する視点 (の獲得)》を獲得していた。また、健康課題の原因・背景となる地域特性を踏まえ、地域の様々な資源を活用しながら《支援の方向性を決めていく視点 (の獲得)》や《支援を具体化していく視点 (の獲得)》を獲得していた。これらは、単に地域看護診断の方法論を理解しただけでなく、今後の保健医療を担う看護師に必要な視点の獲得であると考えられる。すなわち、今日在院日数が短縮し、退院支援や外来での指導の重要性が増している中で、看護師には、対象者の住んでいる地域や生活の状況を把握し、その地域や生活に合わせた支援をすることが求められる。本演習で獲得した地域や生活の状況をとらえ、支援を検討していく視点や方法は、今後の保健医療を担う看護師に必要な対象者を取り巻く地域や生活をとらえてケアを実践する力を身につけることにつながったと考える。

さらに学生は、【地域看護の特質 (への理解の深まり)】として、《地域の健康を高める予防的支援 (への理解)》や《地域の健康を支える住民の主体性 (の理解)》、《地域と連携・協働していく考え方 (の理解)》について理解を深め、さらにそれが看護職の役割であることについても理解していた。今後の保健医療を担う看護師は、住民が住み慣れた地域で安心して生活できるようにするためにも、地域での生活を踏まえた予防的支援や、住民の主体性を引き出していくための支援、さらには地域での生活を継続できるように住民や多職種多機関と連携・協働しながら支援を行っていくことが求められる。今回の演習を通して、地域看護の特質に対する理解を深められたことは、地域で生活していくために必要となる社会資源と連携・協働していく力、地域での生活を踏まえて予防的支援を行う力の基盤になると考える。

これらの学びが得られた理由として、地区踏査やインタビューといったフィールドワークを取り

入れている影響が大きいと考えられる。学生はこれまでの生活体験が少なく、地域を意識した経験がほとんどない⁸⁾。そのため、机上の学修だけでは、地域や地域で生活している人々をイメージすることは困難である。先行研究において、学生が意識的に地域をとらえ、地域の健康課題を明らかにするためには、地域看護診断におけるフィールドワークが重要であるといわれるように⁹⁻¹¹⁾、地域と関わる機会が少ない看護師の学士課程の学生にとって、住民目線や生活を理解するために有効な方法であったと考える。実際、学生は地区踏査やインタビューを行うことで、様々な健康状態、生活の状況があることを知り、多様性を理解していくことで、意識的に地域をとらえ、地域看護を理解するための新たな視点の広がりをもつことにつながったと考える。

2) 地域看護への関心と地域を支える一員としての自覚の醸成

本演習の効果として、【地域看護への関心と視野の広がり】が示されたが、山本¹²⁾が看護系大学の2年生に行った調査によると、地域看護に「興味・関心がある」学生は全体の5%程度であり、大半の学生はイメージが湧かずわからないと回答していることが報告されている。また他の先行研究では、学生は地域社会の一員として「地域」や「生活」をとらえていく視点が不十分であったが、地域を知っていく過程を通して、地域への興味・関心が引き出されていった⁹⁾ことも報告されている。本演習においても、地域看護診断の展開を通じて、「地域」や「生活」をとらえていく過程において、〔地域看護を行うためには専門知識以外の幅広い知識や視野をもつことが大切である〕ことや、〔地域でその人らしく生活するために必要な支援を提供することも看護の大切な役割である〕こと、〔地域看護は今日の社会課題と密接につながっている〕ことといった《地域看護を理解するための新たな視点の広がり》から、【地域看護への関心 (と視野の広がり)】が芽生えていったと考えられる。

また本演習を通じて、学生は〔看護学生の立場でも地域にできることが数多くあること (に気づく)〕や〔看護師として病院に就職した後も地域にできることがあることに気づく〕ことができていた。これは、本演習での特徴でもある担当地区

の健康課題に対して、看護師もしくは看護学生の立場からできることを検討していく過程から、得られた学びであるといえる。多くの学生は、演習前は病院で働く看護師は地域との関わりが少ないと捉えていたが、演習を通して地域で働く看護職に限らず、病院で働く看護師であっても、地域に貢献できることや、地域を支えていく存在であることに気づいていた。これにより学生は地域をより身近に感じ、《地域を支える一員としての意識の高まり》から、地域を支える一員としての自覚が醸成されたと考える。

3) 体験を通じたチームワークについての理解

学生が学んでいた【効果的なチームワークについての理解の深まり】は、教育方法として用いたグループワークによる効果であると考えられる。本演習を通じて、学生はグループメンバーと協力して、情報収集、健康課題の分析、支援計画の立案、発表の一連の取り組みを行った。先行研究において、学生は演習における一連の過程を通して、支援チームの一員として、メンバーシップを養っていた¹³⁾ことや、グループワークを通して協力して結束力を高めたり、多面的に考えることができるようになっていた¹⁴⁾ことが明らかにされている。演習を通して、学生は「メンバー同士で協力してものごとを進めていくことが大切である」ことや、「メンバー同士が責任をもって課題に取り組むことで効率的に作業を行うことができる」ことなどを挙げていた。これは個々の学生がフィールドワークを通して、地域を実際に見ているため、各々が体験した具体的な場面をイメージすることができることで、様々な意見交換ができ、チームワークの理解が深まったと考える。また、グループワークを通して、「メンバー同士の多様な意見によって幅広い視点から物事を考察できる」ことが挙げられていることから、チームにおける連携・協働についても学ぶ機会になったといえる。看護師には、病院などでのチーム医療・チームナーシングを行う上ではもちろん、地域のケアにつないでいく上でも、対象者や多職種多機関などとの関わりが求められる。そのため、看護師は専門職として、各々が自覚と責任をもち、対象者や多職種多機関などの多様な意見や幅広い視点を取り入れながら、客観的にものごとをみていくことが必要である。その意味においても、今回

グループワークを用いたことで、《効果的なチームワークについての理解の深まり》に気づくことにつながったといえる。

以上のことから、看護師の学士課程教育の学生に地域看護診断演習を行うことは、今後の保健医療を担う看護師に必要となる力を獲得するために一定の効果があったことが示唆された。

2. 看護師の学士課程教育での地域看護診断演習の位置づけと今後の課題

2009年度の保健師助産師看護師法の改正により、保健師教育課程の上乗せ教育が可能となり、多くの大学では保看統合教育から保健師選択制もしくは看護師単独教育に移行した。このことにより、看護師教育課程において地域看護学教育は必須ではなくなり、看護師の学士課程教育の水準が担保されなくなる危険性が指摘されていた⁵⁾。一方、看護師の学士課程教育の教員のうち、約9割が看護師教育課程における地域看護学の必要性を認識していることが報告されている¹⁵⁾。

このような状況の中、看護基礎教育検討会では、今後の看護師教育課程について、地域で生活するあらゆる健康状態の人々の特性を理解し、地域における様々な場での看護の基礎を学ぶことや、地域の中で多職種との協働する中の看護の役割を理解するための内容なども含むものとし、「在宅看護論」が、「地域・在宅看護論」へと名称変更することや単位数を増やす方向で報告書がまとめられている⁴⁾。

これを受けて2022年度の入学生から適応される改正カリキュラムを踏まえると、今回の地域看護診断演習は、看護師の学士課程の学生に対する教育として効果的なものであり、改正カリキュラムにおける「地域・在宅看護論」において、地域看護学を構成する教育内容としても、重要な位置づけとなると考える。

今後、看護師の学士課程の学生に対して、今後の保健医療を担う看護師にとって必要となる力を獲得できるようにするために、この演習を継続して実施し、どのような教育を行っていくかを検討していくことが課題である。

Ⅶ 結 語

本研究は、看護師の学士課程教育における地域

看護診断演習により、学生は【地域の健康課題を分析していく視点と方法の獲得】、【地域の健康課題に対する支援を検討していく視点の獲得】、【地域看護の特質への理解の深まり】、【地域看護への関心と視野の広がり】、【効果的なチームワークについての理解の深まり】といった内容を学修していることが明らかとなった。

以上のことから、看護師の学士課程の学生に対して、本演習を行うことは、今後の保健医療を担う看護師に必要とされる力の獲得に効果があったといえる。

引用文献

- 1) 社会保障制度改革国民会議報告書, 内閣府, 28-30, 2013, <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kokuminkaigi/pdf/houkokusyo.pdf> (2019-11-01 アクセス)
- 2) 地域包括ケア研究会, 持続可能な介護保険制度及び地域包括ケアシステムのあり方に関する調査研究事業報告書— 概要版—, 2013, <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kokuminkaigi/dai15/siryoul.pdf> (2019-11-01 アクセス)
- 3) 日本看護協会, 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン～いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護～, 9-17, 2015, <http://www.nurse.or.jp/home/about/vision/index.html> (2019-11-01 アクセス)
- 4) 厚生労働省, 看護基礎教育検討会報告書, 2019, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2019-11-01 アクセス)
- 5) 佐伯和子, 尾崎章子, 佐藤玉枝: 日本地域看護学会第17回学術集会報告: 理事会セミナー 地域看護学の定義と看護師教育課程における「地域看護学」教育, 日本地域看護学会誌, 17 (2), 62-74, 2014.
- 6) 牛尾裕子: 学士基礎教育過程における地域看護診断の演習・実習教育の現状, 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 21, 37-49, 2014.
- 7) エリザベス T. アンダーソン: コミュニティ アズ パートナー 地域看護学の理論と実際 パートナーとしての地域のプロセス, エリザベス T. アンダーソン, ジュディス・マクファーレイン編, 金川克子・早川和生訳, 医学書院, 東京, 133-269, 2007.
- 8) 大須賀恵子: 看護大学生の地区診断技術を高める教育方法の検討— 地区踏査・マッピングの導入, 保健師ジャーナル, 62 (10), 876-881, 2006.
- 9) 松尾和枝, 酒井康江, 蒲地千草他: 地区診断を用いた地域看護学演習の取り組みと今後の課題, 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report, 4, 171-182, 2005.
- 10) 金川克子: 地域看護診断の方法 エスノグラフィックアプローチ, 東京大学出版会, 32-67, 2011.
- 11) 西地令子, 鬼丸美紀, 豊島泰子他: 地域診断におけるフィールド演習の取り組みと今後の課題, 聖マリア学院大学紀要, 3, 41-53, 2012.
- 12) 山本澄子, 杉山希美, 山田静子他: 看護教育効果を探る— 「地域」と「在宅」の看護に対する学生の理解から—, 北海道文教大学研究紀要, 39, 87-92, 2015.
- 13) 大森純子, 小林真朝, 小野若菜子: コミュニティ アセスメントの実践的演習の成果, 聖路加看護大学紀要, 40, 105-111, 2014.
- 14) 野原真理, 照沼美代子, 若林千津子他: 本学における地域看護学の授業展開— 地域診断の授業方法の評価—, 医療保健学研究: つくば国際大学紀要, 2, 87-106, 2011.
- 15) 安藤陽子, 小川克子, 河原田まり子: 看護師課程における地域看護学の必要性に関する看護教員の認識と属性との関連, 日本地域看護学会誌, 21 (2), 58-64, 2018.